

「戦争のこと、シベリア抑留のこと、100歳まで生きて語り継ぐ」と宣言して活動されている西倉勝さんは現在99歳。たいへんにお元気な方である。兵隊として召集前には、東京の東大和にあった日立航空機立川工場で働いていた。ならば右の新聞記事にある、那須野寿さんともすれ違っていただかもしれない…。

| 西倉勝さん 履歴書 から |       |                              |  |
|--------------|-------|------------------------------|--|
| 1925(大正 14)) | 5月10日 | 新潟県刈羽郡二田村新保に生まれる             |  |
| 1943(昭和 18)  | 1月    | 日立航空機立川工場に就職<br>総務部庶務課人事係に配属 |  |
| 1945(昭和 20)  | 1月15日 | 陸軍召集令状が届き、新潟県新発田連隊に入隊        |  |
|              | 10月8日 | コムソモリスク第4収容所に到着 抑留生活が始まる。約3年 |  |
| 1948(昭和 23)  | 7月28日 | 恵山丸にて舞鶴上陸                    |  |

市民のひろば・憲法の会 2024年12月 心に刻む不戦のつどい

## 極寒のラーゲリ「シベリア抑留」を語る

講師 西倉 勝

シベリア抑留者だった父を語る (細田伸昭 檜崎由美)

日時 2024年12月7日(土)  
14時00分～16時30分  
(開場13時30分)

場所 柴崎学習館 第1視聴覚室  
(立川駅徒歩10分 裏面に地図)

資料代 500円  
定員 50名(予約制ではありません)



(西倉 勝さん)

1945年8月、日本政府はポツダム宣言を受諾し無条件降伏をしました。戦地で武装解除された日本軍兵士や民間人は、帰国の途につくはずでした。しかし、旧満州や中国北部、千島列島等では、侵攻してきたソ連軍の捕虜となった約60万人もの人々が、シベリア、カザフ、キルギスなどソ連各地やモンゴルなどへ、労働力として強制的に連行されたのです。ラーゲリと呼ばれる収容所に入れられ、長期にわたる抑留生活を強いられました。飢寒・飢え・感染症の蔓延の過酷な強制労働により、約6万人もの人が亡くなったといえます。

2024年12月の「心に刻む不戦のつどい」は、この「シベリア抑留」に焦点をあて、その体験者である西倉勝さんの話を伺います。また「市民のひろば・憲法の会」の関係者で、「シベリア抑留者」を父に持つ2名(細田伸昭さん、檜崎由美さん)が、西倉さんの講演に先立って、それぞれ10分ほど「父を語る」と題し「シベリア抑留」に至った経緯などを話します。

歴史に埋もれさせてはならない「シベリア抑留」。この問題について学ぶ「心に刻む不戦のつどい」に、どうぞご参加ください。

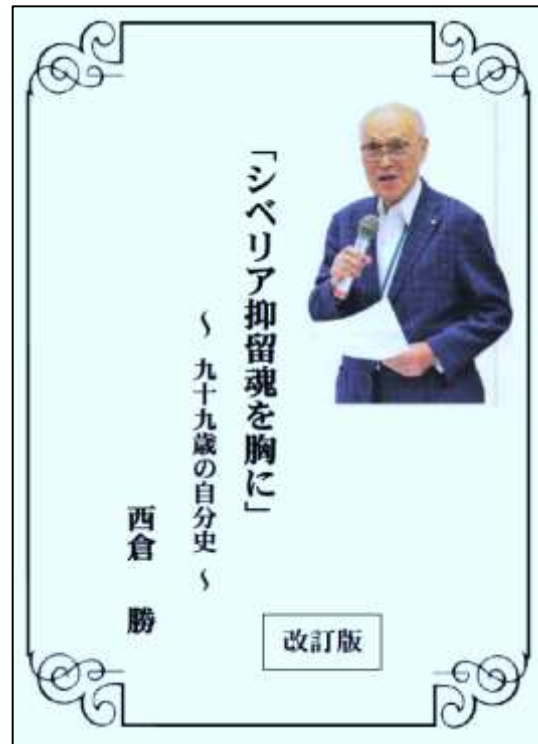
### 西倉勝さんプロフィール

1925年(大正14年)5月10日生まれ。(99歳) 新潟県出身。昭和20年1月召集。朝鮮と満州とソ連の国境付近で終戦。ソ連軍によりシベリアへ移送される。昭和23年8月シベリアより復員。生命保険会社に32年勤続。57歳の時に社会保険労務士試験に合格。年金相談員として90歳まで従事。92歳より平和祈念展示資料館にて語り部として活動。今日に至る。

主催:市民のひろば・憲法の会

メルアド: shimin\_hiroba53@yahoo.co.jp 電話: 080-3094-3353(ならぎき)  
(注:電話は、日曜、水曜以外の12時～14時をお願いします)

※書籍販売、チラシ等についての注意事項が裏面にありますのでご覧下さい。



99歳の誕生日に合わせて今年5月に、西倉勝さんは自分史『シベリア抑留魂を胸に』を自費出版しました。



空襲で亡くなった寿さんの遺影

戦後79年  
今、語らねば

直撃弾で下サレ身(死)即死。安曇野市三郷明盛の那須野寿さん(92)は太平洋戦争末期の1945(昭和20)年2月、東京都北多摩郡大和市(現東大和市)にあった軍需工場に動員された兄の寿さんを空襲で失った。その経緯が詳しく記された書面は大切に保管している。兄が16歳で前途を奪われてからまもなく80年。節目を前に一度と兄のような犠牲が生まれないよう改めて願っている。

戦争末期 東京で小学生時代を過ごした 那須野寿さん(92)=安曇野市

## 軍需工場跡地に慰霊碑「悲惨さ忘れないで」



日立航空機立川工場 陸軍航空機のエンジン製造工場として、現在の東京都東大和市に設置。航空機メーカーの立川飛行機(現立飛ホールディングス)に納品していた。戦時下の増産のため、1944年4月以降、約2000人の学徒が動員され、ピーク時の従業員は約1万4000人。45年2月17日の初空襲では、約7分間の攻撃で78人が死亡。4月19、24日の空襲を含め計111人の死者を出した。93年まで使われた変電所の建物は、市文化財(史跡)に指定され、毎週水、日曜に公開している。

丸眼鏡をかけた丸刈りの少年。あどけなさを残る顔立ちの兄の姿が、自毛仏間の遺影に納まっている。おとなしく、勉強熱心だった。習字も上手でね。父の手ほどきを受けつつ筆を執っていたのを覚えている。「戦争がなければもっと勉強ができたろう。家族も頼りにしていたのに」。

配属された。日本の敗色が濃厚になる中、一帯の軍需工場が米軍の標的となり、空襲警報が鳴る日が増えた。そして45年2月17日。「兄は日曜出勤で出かけたまま、帰ってこなかった」。寿さんはすっかりおぼろげになった記憶をたどる。「夕方だったかな。知らせを受けた父が兄の死を聞いた。その日の午前10時半、米海軍機動部隊の空母から飛び立った艦載機数十機が工場を襲撃。兄が退避した防空壕に爆弾が直撃した。「数十機がラナル機動部隊頭上に爆弾投下工場ヨリハ待避命令ヨリ待避中直撃弾により身軀粉砕即死シタルニ至ル」。戦後、母が父の死を厚生大臣に宛てた「学校報国隊員として終戦後業務に協力させられた者について申立書」の控えにはこう記されている。この日、工場での死者は78人上った。兄の他、動員労働者の女子学生らが亡くなったという。防空壕に連れて逃げた人が米軍機に見つか

り、何度も巡回しながら爆撃された。戦後、参列した慰霊祭で、生き残った元学徒が教えてくれた。兄の死から一月もたたない3月10日、東の方が赤々と燃えているのを見た。一夜にして約10万人の命が失われた東京大空襲だった。

「母がしきりに(信州に)帰りたいがってね。まもなく迎える小学校国民学校」の卒業式も待つてくれなかつた。やつとこのことで取れた2人分の切符を手に母と母の実家のある松本市へ向かった。「兄の遺骨が入った木箱を首から提げていると、みんな道を空けてくれた」。

そのまま松本にとどまる中、東京に残った父や姉から、自宅や通っていた国民学校が空襲で焼けたと聞いた。その後、父からも引き揚げ、安曇野市の父の実家で敗戦を迎えた。両親は兄の墓を建てた。

現在は公園になっている工場跡地には戦後50年の95年、慰霊碑が建てられた。裏には兄の名前も刻まれている。園内には工場の変電所だった建物が唯一残る。機銃による無数の穴が空襲の苛烈さを物語。慰霊祭には2、3度参列した。遺族の高齢化で随分前に開かれなくなった。兄が犠牲となった空襲は「長野で振り返られる機会ほとんどない」。そんなさみしい気持ちを抱えつつ、「慰霊碑が建てられ、建物を後世に残してもらっているのはありがたい。訪れた人が戦争の悲惨さを忘れないでいてくれるだろうから」。これからは静かに祈りをささげ続ける。(井口賢太)

# 兄も思い出も空襲が奪った